

法華経伝承の一様相*

—Upāyakaśālyā-Parivarto Nāma Dvitiyaḥ v. 64c—

山 崎 守 一

1. はじめに

ネパール系諸写本を基礎資料として、『法華経』第2章「方便品」(*Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, Upāyakaśālyā-Parivarto Nāma Dvitiyaḥ) の第42–70詩節のテキストの再校訂、韻律分析、そして写本の系統分類の試みと、いわゆる仏教混淆梵語(BHS)に横たわる種々の問題に中期インド・アリアン諸語(MIA)の視座から註釈する機会を得た⁽¹⁾。

この中で、写本の系統分類をし、それぞれの系統ごとの校訂本を作成しようと試みたが、系統分類は不可能であった。なぜなら、同一写本の筆記者が二つの読みを知っていたと思われる事実もあり、11世紀に集中している貝葉写本間ですら読みの違いが甚だしく、その上、詩節ごとに分類できる系統の組み合わせが変わるという事実に度々遭遇した。つまり、Aという詩節で分類できた系統とBという詩節で分類できた系統とが合致しないということである。そして、この現象は詩節の数が多くなればなるほど複雑に錯綜するようになったからである。

しかし、語彙の異読(Variant Reading)に限って言えば、正書法(Orthography)や語形の細かい点を問題としなければ、ネパール系諸写本の語形はおおよそ二つに分類することができた。

例えば、第42詩節の pāda c を Kn も W も nāyakā と読んでいるが、ネパール系写本の読みは、

nāyikā	C1 C2 R P3 T4 T5 T8 T9 A2 A3
tāyina	B T7 N2 N3
tāyinaḥ	K C6 (?) T3 T6
tāyino	Pk C3 C4 C5 P1 P2 T2 N1

となり、中央アジア写本は nāyakā で、ギルギット写本は tāyino であることからネパール系写本は、中央アジア系とギルギット系とに分けられる。

もう一例挙げると、46b に bahu-buddha-koṭiṣu と bahu-kalpa-koṭiṣu の二通りの読みがある。

-buddha- Pk C1 C2 C3 C4 C5 R P3 T4 T5 T8 T9 A2 A3

-kalpa- K B P₁ P₂ T₂ T₃ T₆ T₇ A₁ N₁ N₂ N₃

これも O は -buddha-、D₂ は -kalpa- であり、2 系統に分類できる例である。

しかしながら、幾通りもの読みが現われ、その読みの数だけ解釈が可能な詩脚（Pāda）に出くわすことがあった。その一つは、第64詩節の pāda c である。この詩脚は、

Kn: kaṭasī ca vardhenti punaḥ punas te

チベット語訳：dur khrod de dag phyi phyir ḥphel bar byed

「彼らは繰り返し繰り返し墓場を増大する」

とあるが、写本間の異同が甚だしい上に、漢訳も梵文とは異なる独自の読みをしている。

本稿は、特にネパール系諸写本におけるこの詩脚の系統分類を試み、それらの系統ごとの読み（テキスト）を示し、さらにそれぞれの系統にみられる言語学上の諸問題を解決する。そして、二つの漢訳に何故それぞれ異なる独自の訳語が与えられたかを検討することを目的とする。

註

* 本稿は、1999年9月に南山大学で開催された日本宗教学会に於いて、「法華経伝承の一樣相」と題して研究発表した原稿を大幅に加筆して論じたものである。

(1) 「梵文法華経校訂の試み—第2章「方便品」(vv. 42—70)を中心に—」、『法華経の思想と展開』（法華経研究XIII）（近刊）

本稿で用いる略語は以下ようになる。

[法華経の刊本]

Kn: H. Kern and B. Nanjio, *Saddharmapuṇḍarīka*, *Bibliotheca Buddhica* X, St. Petersburg 1908—12.

W: U. Wogihara and C. Tsuchida, 『改訂梵文法華経』 *Saddharmapuṇḍarīka-sūtram*, *Romanized and Revised Text of the Bibliotheca Buddhica Publication by Consulting a Sanskrit MS. and Tibetan and Chinese Translations*, Tokyo 1934—35.

[法華経の写本]

必要最小限の情報にとどめるので、詳細は *Sanskrit Manuscripts of Saddharmapuṇḍarīka, Collected from Nepal, Kashmir and Central Asia. Romanized Text and Index* by K. Tsukamoto, R. Taga, R. Mitomo and M. Yamazaki, Vol. I, Tokyo, 1986, Introductionを参照のこと。

(1) ネパール・チベット写本

- K : 東洋文庫所蔵（河口将来） 貝葉 1070年 WのKに当たる
- Pk : 民族文化宮図書館所蔵 MS. No. 0004 貝葉 1082年
- C1 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 1032 紙 近代
- C2 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 1324 紙 近代
- C3 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 1682 貝葉 11世紀
- C4 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 1683 貝葉 1039、1036/1037年 KnのCaに当たる
- C5 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 1684 貝葉 1064/1065、1063/1064年 KnのCbに当たる
- C6 : ケンブリッジ大学所蔵 Add. 2197 貝葉 1093、1091/1092年
- B : 大英博物館所蔵 MS Or. No. 2204 貝葉 11/12世紀 KnのBに当たる
- R : 英国王立アジア協会所蔵 MS No. 6 紙 18世紀 KnのAに当たる
- P1 : フランス国立図書館所蔵 MS Nos. 138-39 紙 19世紀
- P2 : フランス国立図書館所蔵 MS Nos. 140-41 紙 1826年
- P3 : アジア協会（パリ）所蔵 MS No. 2 紙 19世紀
- T2 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 408 貝葉 11世紀
- T3 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 409 紙 近代
- T4 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 410 紙 近代 1799/1800、1806年
- T5 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 411 紙
- T6 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 412 貝葉 11世紀
- T7 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 413 貝葉 11世紀
- T8 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 414 紙 KnのKに当たる
- T9 : 東京大学図書館所蔵 MS. No. 415 紙 近代
- A1 : アジア協会（カルカッタ）所蔵 MS. No. G 4079 紙 1680、1679/1680年
- A2 : アジア協会（カルカッタ）所蔵 MS. No. G 4199 紙 1713、1711/1712年
- A3 : アジア協会（カルカッタ）所蔵 MS. No. B7 紙
- N1 : ネパール国立公文書館所蔵 MS. No. 4-21 貝葉
- N2 : ネパール国立公文書館所蔵 MS. No. 3-678 貝葉
- N3 : ネパール国立公文書館所蔵 MS. No. 5-144 貝葉

(2) ギルギット写本

- D2 : インド連邦国立公文書館所蔵 Serial No. 47 白樺樹皮
- D3 : インド連邦国立公文書館所蔵 Serial No. 48 白樺樹皮

(3) 中央アジア写本

○ : ソヴィエト連邦科学アカデミー東方学研究所所蔵 7/8世紀

[引用テキスト]

- Āy. = *Acārāṅga-sūtra, Erster Śrutaskandha, Text, Analyse und Glossar*, von W. Schubring, Leipzig 1910.
- Dasav. = *The Dasaveyāliya Sutta*, edited by E. Leumann, Ahmedabad 1932.
- Dhp. = *The Dhammapada*, Hinüber and Norman ed. PTS, Oxford 1994.
- Isibh. = *Isibhāsiyāim*, Aussprüche der Weisen, Aus dem Prākṛit der Jainas übersetzt von W. Schubring, Nebst dem revidierten Text, Hamburg 1969.
- Th. = *The Theragāthā*, PTS, London 1966.
- Utt. = *The Uttarādhyaṇasūtra*, edited with an Introduction, Critical Notes and a Commentary by J. Charpentier, Uppsala 1922.
- Uv. = *Udānavarga*, herausgegeben von Franz Bernhard, Göttingen 1965.

[その他の略記号]

acc. = accusative ; AMg = Ardha-Māgadhī ; BHS = Buddhist Hybrid Sanskrit ; BHSD (/G) = F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary (/Grammar)*, New Haven 1953 ; caus. = causative ; CPD = *A Critical Pāli Dictionary*, Copenhagen 1924 - ; f. = feminine ; Geiger = *A Pāli Grammar*, revised and edited by K. R. Norman, Oxford 1994 ; loc. = locative ; m. = masculine ; m.c. = metri causa ; MIA = Middle Indo-Aryan (= 中期インド語) ; MW = Sir Monier Williams, *Sanskrit English Dictionary*, Oxford 1899 ; nom. = nominative ; PED = *The Pāli Text Society's Pāli-English Dictionary*, London 1972 ; Pischel = R. Pischel, *Comparative Grammar of the Prākṛit Languages*, Benares 1957 ; Pkt = Prākṛit ; pl. = plural ; Skt = Sanskrit ; sg. = singular ; v.l. = variant reading

2. 写本の6系統

ギルギット写本は、D₂ D₃とも

kaṭasiṃ vivardhenti punas punaḥ tā (ただし、D₃の punas 以下は欠損)

と読み、中央アジア写本○は

kaṭasiṃ ca vardhenti punas punaḥ te

と読み、両写本とも同じような読みである。ところが、ネパール系写本には幾通りもの読みがあり、大まかに次の6つのグループに分類することができる。

グループ I	—	C3 T7 N1
グループ II	—	K Pk T3 T6 N2
グループ III	—	C4 C5 C6 B R P1 P2 T2 T9 A1 N3
グループ IV	—	C1 C2 P3 T8
グループ V	—	A2 A3
グループ VI	—	T4 T5

そして、それぞれのグループの読みは、以下のようになる。

- I. T7: kaṭasim⁽¹⁾ vivardhenti⁽²⁾ punaḥ punas tām
 1) C3 kaṭāsīm N1 kaṭisīm
 2) N1 vivarddhenti
- II. T3 N2: kaṭasim⁽¹⁾ vivarttenti⁽²⁾ punaḥ punas tām
 1) K kaṭhāsīm Pk kaṭasi T6 kaṭasin
 2) Pk ci vivartteti
- III. C6 B: kaṭānsi⁽¹⁾ vivardhenti⁽²⁾ punaḥ punas tām⁽³⁾
 1) P1 P2 T2 N3 kaṭāmsi C5 kaṭāmsi C4 A1 kaṭānsi R kaṭānsi T9 kaṭāsmi
 2) T9 A1 vivarddhenti C4 varddhenti P1 P2 vardhanti T2 varddhanti N3
 vardhyanti
 3) R kām
- IV. C2: gatiṃ⁽¹⁾ ca viśyamti⁽²⁾ punaḥ punas tām
 1) C1 gati P3 T8 gatiñ
 2) P3 T8 viśyenti
- V. A3: gatiṃ⁽¹⁾ ca vidhyanti⁽²⁾ punaḥ punas tām
 1) A2 gatiñ
 2) A2 vidhyenti
- VI. T4: gatismi vivardhenti⁽¹⁾ punaḥ punas tām⁽²⁾
 1) T5 vivarddhenti
 2) T5 tām

これらグループ I～VIについて検討してみよう。

グループ I

kaṭasim の v.l. kaṭāsīm は母音の長短の区別の無かった、カローシュティ（Kharoṣṭhi）

や初期ブラーフミー (Brāhmi) 文字からの転写と考えるなら解決するが、韻律は変則である。しかしながら、kaṭāsīm は kaṭāssi から派生した可能性もあり、その場合はグループⅢに分類される。また、kaṭāsīm はネパール系写本に s と ś の区別が厳密に無かったように⁽¹⁾、口蓋音 (Palatalization) ś と見做して母音の口蓋音化をはかったのかもしれない。尚、kaṭāsi は「墓場」と訳されるが、実際には死体を捨てる場所、すなわち「屍林」であり、そこにおいて死人は鳥獣の餌となり、腐敗して土に還っていくのである。

vivardhenti (Skt. caus. vivardhayanti) と vivarddheti は正書法 (Orthography) の違いである。問題なのは pāda の最後の語 tām であるが、Kn も W も te と校訂する。Kn は恐らく O の読みを、W はチベット語訳の de dag を採用したためであろう。しかし R kām (誤表記?) を除けばすべての写本が tām (/m=f. sg. acc.) であるので、te とは読めないはずである。tām は kaṭāsīm にかかる代名詞ということになる。したがって、この詩脚は、「彼らは繰り返し繰り返し墓場を増大する」、或いは「満たす」の意味となる。

グループⅡ

kaṭāsīm の v.l. kaṭhāsīm は韻律から kaṭhāsīm でなければならないが、しかし kaṭhāsi[m] [vi]varttenti でも正規の韻律となる。ただし、-ṭ- と帯気音 (aspiration) -ṭh- の混同は中期インド語ではしばしばみられる現象であり、筆記者が -ṭ- を -ṭh- と見做した結果であろう。もし -ṭ-/-ṭh- の推定が正しく、kaṭhāsīm の読みが正しければ、kaṭāssīm/kaṭhāssīm の可能性もあり、この場合 kaṭāssīm はグループⅢのように loc. ということになる。

また、Pk kaṭāsi ci vivartteti (= 𑀅𑀲 𑀅𑀲 𑀅 - - 𑀅) は韻律的には可能であるが、これは本来、kaṭāsi ci [vi]vartteti あるいは kaṭāsi [ci] vivartteti (= 𑀅 𑀅𑀲 𑀅 - - 𑀅) と読まれていたかもしれない。ここで気づくことは動詞が複数形ではなく単数形であるということである。しかし中期インド語における -ati が Skt. -anti に基づいている場合がしばしばあり⁽²⁾、ここもその例と考えられる。optative や aorist においても sg. 語尾が pl. 語尾として用いられることがある⁽³⁾。

さらに ci は vi と混同したものであり、Skt の pi から派生している。c と v との混同はアショーカ王碑文の時代から起こっていた⁽⁴⁾。

kaṭāsin と kaṭāsīm は正書法 (Orthography) の違いである。

グループⅠと同様に tām を f. sg. acc. と見做せば、この詩脚 (pāda) は「彼らは繰り返し繰り返し墓場に戻って来る」の意味になる。

グループⅢ

kaṭānsi と kaṭāṃsi は正書法の違いであり、kaṭānsi/kaṭāṃsi に v.ll. kaṭāṃsi, kaṭānsi,

kaṭassi, kaṭasmi がある。kaṭaṃsi と kaṭānsi も正書法の違いだけで同じ語形である。また、kaṭassi と kaṭasmi は Skt. *kaṭasmin > kaṭasmi > kaṭassi が考えられるから同一語である。ここで問題となるのは kaṭānsi/kaṭāṃsi, kaṭānsi/kaṭaṃsi それに kaṭasmi/kaṭassi が果たして同一語であるかどうかということである。言い換えれば kaṭānsi/kaṭāṃsi=kaṭānsi/kaṭaṃsi=kaṭasmi/kaṭassi が可能であるか、もし可能であるなら、それはどのように可能であるか、ということである。

Pāli や Pkt. においては、二重子音や多重子音の、その直前の Skt. の長母音は短母音に転訛するのが一般的規定である。例えば、ātt>att である。このことはアショーカ王碑文の中部から東部にかけての摩崖法勅、石柱法勅、小摩崖法勅にも当てはまる。これに反して、Pischel⁽⁵⁾ は Māhārāṣṭrī, Jaina-Māhārāṣṭrī, Śaurasenī, Māgadhī 等、所謂 Pkt. においても歯擦音 (sibilant) や r を伴う子音の重なりがある語において、特徴的に長母音が保持されることがある (e.g. īsara=īśvara; gāya=gātra) ことを提示する。また、アショーカ王碑文のギルナール (Girnār) や石柱法勅と小摩崖法勅の一部では、Skt. の長母音そのまま保持されている。これに加えて西北インドの諸言語 (Sindhī, Lahndā, Western Panjābī, Kāshmirī) においても二重子音の前の長母音が長母音のまま保持される⁽⁶⁾。もっともカローシュティー文字は長・短母音の区別をもたないが。

そこで、『法華経』が西北インドとのかかわりが深かったこと、それに上記の西北インドの諸言語を中心に二重子音の前の長母音のまま保持されるという事実を考慮するなら、筆記者が短母音と長母音を区別していなかったことも考えられ、kaṭānsi/kaṭāṃsi と kaṭānsi/kaṭaṃsi は同一語と見做して差し支えなからう。

もう一つの可能な解釈を提示してみよう。kaṭānsi/kaṭāṃsi は、類推の域を出ないのであるが、恐らく kaṭa- の loc. が kaṭaṃsi であることから、その女性名詞を kaṭā- と見做して、その loc. を kaṭānsi/kaṭāṃsi と考えたのではなからうか。AMg. において maṇasā や vayasā を伴う場合、例えば、

Uttajjhāyā 8, 10cd: no tesim ārabhe daṃḍaṃ maṇasā vayasā kāyasā ceva
に於いて kāya の inst. は kā(y)ena ではなく kāyasā であり⁽⁷⁾、この他に bhayasā=bhaeṇa (bhayena, Dasav. 7, 54), balasā (Uv. 3, 17) 等があることがその証左であろう。つまり、kaṭā- の本来の loc. kaṭāe の語形をとらずに kaṭaṃsi に影響されて kaṭāṃsi の語形をとったということである。

この推定が正しければ、kaṭānsi, kaṭāṃsi, kaṭānsi, kaṭaṃsi, kaṭasmi, それに kaṭassi のいずれもが kaṭa- あるいは kaṭā- の loc. sg. である。因みに Pkt. における m. loc. 語尾には -aṃsi, -amhi, -assi, -ammi がある。

次に、動詞を検討するに pāda の先頭語が kaṭānsi, kaṭāmsi, kaṭānsi, kaṭāmsi, kaṭāsmi, kaṭāssi のいずれであっても、韻律からは C₄ のように varddhenti (写本は va[tva]<rdde>nti と修正されている)、もしくは vardhenti (接頭辞 vi- を削除)と読むべきである。var[d]-dhenti は vṛdh- の使役形 Skt. vardhayanti であり、文脈から使役形が要求される。

そして、tāṃ は次に来る語 duḥkhena の d- との連声によって tān (cf. T tān) となったと解することができる。kaṭa には「死体を遺棄する場所」⁽⁸⁾ の意味もあるので、「屍体を遺棄する場所で自分を膨張させる」と訳すことができ、塚墓で繰り返し自分の屍体を膨張させると解釈することができる。塚墓に膨張した屍体が遺棄されているという表現は、初期仏典にしばしばみられる⁽⁹⁾。

ただ、このⅢとグループⅠとが同一の伝承ではないかという疑念が起る。つまり、グループⅢの kaṭāmsi や kaṭāmsi が、語末の -i を -ī の m.c. とみることができれば、グループⅠの kaṭāsi と同一語ではないかということである。グループⅢの kaṭāmsi は kaṭāsi と同一語であり、『正法華経』でみられるように、a と ā の混同とみるならば⁽¹⁰⁾、kaṭāsi と kaṭāsi は同一語となる。それに長母音と短母音の区別がなく、アヌスヴァーラを表示する記号のないカローシェー文字のような書体からの転写であれば、当然 kaṭāmsi や kaṭāmsi は kaṭāsi と同一語と考えられるからである。

グループⅣ

viś- は punar を伴って「戻る」、「帰る」の意味となるが、viśyanti が現在形なのか未来形なのかが問題となろう。Geiger⁽¹¹⁾ によれば、Pāli において重音節省略 (Haplology) によって 1 音節が消失することがある。例えば、pavisassāmi に対する pavissāmi がこの例であり、未来形の意味「私は入るでしょう」をもつ。これに反して Edgerton⁽¹²⁾ は現在形 praviśyāmi (> pavissāmi) とみている。viśyeṃti については、写本の a 音と e 音の区別がつきにくいのであるが、もしこの読みが正しければ Skt. viśyayanti となり、Skt. veśayati と同じく caus. と理解すべきなのだろうか。いずれにしてもこの読みを訳せば、「彼らは繰り返し繰り返し(悪)趣に入る(戻って来る)」となる。

そこで、この詩脚が何故 kaṭāsi ではなく、gati- なのかを検討してみよう。第64詩節を Kn で示せば、

te kāma-hetoḥ prapatanti durgatiṃ
 ṣaṭṣū gatiṣū parikhidyamānaḥ /

kaṭasī ca vardhenti punaḥ punas te
duḥkhena saṃpiḍita alpa-punyaḥ //

彼らは愛欲の故に悪趣に堕ち、
六趣において苦しめられつつ、
繰り返し繰り返し墓場を増大し、
福德が少なく苦悩に苦しめられた。

とあり、pāda a に dur-gati が、b に saḍ-gati があることから、この伝承は（悪）趣（gati）に戻って来る、と理解したのであろう。仏教では地獄、餓鬼、畜生を三悪趣とも三途とも言い、さらに阿修羅を加えて四趣とも言う。輪廻転生をすること自体が煩惱に汚された結果とみて、人と天をも含めて六つの悪趣と見做すこともある。これに対して、ジャイナ教では四つの gati を認めている。すなわち sugai (< sugati 善趣) は ① 神や ② 人間を意味しており、dōggai (< duggai < duggati < durgati 悪趣) とはいえ ① 動物や ② 地獄のことである⁽¹³⁾。

グループV

vidhyanti の語根が何であるかが問題となろう。この語を純粹の Skt. 語形とみるなら語根は、① vyadh- であり、MIA における -dh-/-th- とみるなら、② vyath- ということになる。

① vyadh- の場合について検討してみよう。この意味は、「貫く」、「打つ」、「穴をあける」であり、目的語が六趣では意味をなさない。ただし、“to fix, to cling to”⁽¹⁴⁾ があることと、tāṃ を tān と解して「彼らを繰り返し（悪）趣に固定する」、つまり何度も（悪）趣に縛りつけるともとれないこともない。

また、Skt. の現在形 vidhyati も受動形 vidhyate も Pāli においては vijjhati である。このことはグループVの動詞 vidhyanti が受動形 vidhyante である可能性を表わしていることになる。Pāli だけでなく、Pkt. において三人称受動形の語尾は -(t)i が一般的である。それ故、受動形と理解すれば、「彼らは繰り返し（悪）趣に突き刺される」の意味をもつ。

次に、②の -th- < -dh- については、Dhp. 173 における pithiyati (pass. of (a)pi-dahati) < Skt. apidhiyati (api-dhā-) の例 (cf. pithiyate Uv. 18, 8) があり、その逆の例もある。すなわち、Skt. *methaka > medhaga (Dhp. 6) である。この他に、Uv. 32. 54 に vethate が、そして、その並行詩節 Udāna 3. 3 に vedhati がある。また、Edgerton⁽¹⁵⁾ は PED が vyadhati と vedhati の両語形を挙げていることを引用して、vyadhati が中期インド語の vedhati と Skt. vyathati との中間の語形であることを記述している。

したがって、-th-/-dh- という事実から、語根を vyath- にとれば、「彼らは繰り返し（六）趣に戦慄する」の意味になる。

ところで、悪趣 (= 地獄) は恐ろしい所であり、輪廻転生の度にそこに突き刺されて (① vyadh-) はたまったものではないし、生まれ変わる度に地獄に突き落とされる恐怖に怯える (② vyath-) ことは、誰しもが避けたい道理であろう。しかしながら、果たしてこの伝承はこのような意味を伝えたかったのであろうか。むしろ、グループIVのように、gatiに入る (viś-) とか、グループIのように、gatiを増大する (vṛdh-) とかの意味を伝えようとしていたと理解する方が自然であるように思われる。ś と dh を混同する方言があったとみること、すなわち viśya- / vidhya- と理解することには無理があるように思われる。しかし、第6類動詞 viś- の現在語幹を viśya- としたと同様に、第1類動詞 vṛdh- の現在語幹を vardha- ではなく、直接語根から vidhya- (<*vṛdhya-) と、この伝承が解釈したと考えることは可能である。もしそうなら、この詩脚は、「彼らは繰り返し (悪) 趣を増大する (満たす)」となる。

グループVI

この詩脚は、グループIIIと同様、tām を tām にとれば、「彼らは繰り返し (悪) 趣において彼らを膨張させる」の意味をもつことになる。gatismi を kaṭānsi に置き換えれば、グループIIIと全く同一の詩脚となる。

グループI～VIまでを検討して言えることは、pādaの冒頭にある二語の組み合わせがIは kaṭāsī と vṛdh-、IIは kaṭāsī と vṛt-、IIIは kaṭa-、kaṭā- (+loc.語尾) と vṛdh-、IVは gati と viś-、Vは gati と vyath-/vyadh- (=vṛdh-?)、VIは gati- (+loc.語尾) と vṛdh- である。それ故、I～VIはそれぞれ個々別々の組み合わせである。先にグループIの異読の中にはグループIIIに入る可能性のある詩脚があること、またグループIIIがグループIと同一の可能性もあることを指摘したが、グループI～VIはそれぞれ別個の詩脚と見做しても差し支えなからう。そして、グループIだけが D2 D3 O とほぼ同じ系統とすることができる。

さらに、同じ第64詩節の pāda b (Kn: ṣaṭṣū gatiṣū parikhidyamānāḥ) において ṣaṭṣū と gatiṣū の語順が逆になる写本がある。この2系統を表示すれば、

(1) ṣaṭṣū gatiṣū(/u): K Pk C1 C2 C3 R P3 T4 T5 T8 T9 A2 A3 N1 N2

(2) gatiṣū ṣaṭṣū(/u): C4 C5 C6 B P1 P2 T2 T3 T6 T7 A1 N3

である。(2)はグループI～IIIに含まれ、特にグループIIIに集中している。しかし、この表示からわかるように、グループIの C3 N1 とグループIIの K Pk N2、それにグループIIIの R T9 とが、(2)のグループには含まれないことから、ネパール系の伝承がこれら2系統に分類できるわけではない。因みに D2 と D3 は gatiṣū ṣaṭṣū であり、O は gatiṣv anekeṣu である。

このように、同一の詩節であっても、A という詩脚で分類できた系統と B という詩脚で分類できた系統とが合致しないということが起こり得る。ネパール系諸写本において、詩節や詩脚の数が増えれば増えるほど系統が複雑に錯綜するようになるのが現実である。このことは、他の詩脚群とは無関係に、この 64c のグループ I ~ VI がそれぞれ別個の独立した詩脚と見做してもかまわないということを支持する要因にもなる。

註

- (1) J. Brough, "The Language of the Buddhist Texts", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XVI, p. 354.
- (2) BHSg §§ 28. 3-7.
- (3) optative については BHSg § 29. 15、aorist については § 32. 13. AMg. でも同様に、3. pl. の動詞として 3. sg. の動詞が使用されることがある。cf. 拙稿、「Uttarajjhāyā 研究 III」、『中央学術研究所紀要』第11号、p. 26; A.M. Ghatage, "Concord in Prakrit Syntax", *Annals of the Bhandarkar Oriental Research Institute*, Vol. 21, p. 80.
- (4) K.R. Norman, *Elders' Verses II*, London 1971, p. 59.
- (5) Pischel § 87.
- (6) 詳しくは R.L. Turner, "Geminates after Long Vowel in Indo-Aryan", *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, Vol. XXX, 1967, pp. 73 - 82 = *Collected Papers 1912-1972*, pp. 405-15 をみよ。
- (7) cf. Pischel § 364; E. Leumann, *The Dasaveyāliya Sutta*, Ahmedabad 1932, p. 126.
- (8) MW s.v. kaṭa.
- (9) Visuddhimagga p. 178 において、死後死体が膨張することを膨張相 (uddhumātaka) と言い、Dīghanikāya ii 295 において、sarīraṃ sīvathikāya chaḍḍitaṃ ekāhamataṃ vā dvihamataṃ vā tihamataṃ vā uddhumātakaṃ vinīlakaṃ 「塚墓に遺棄された屍体が、死後一日、或いは二日、或いは三日を経て、膨張し、紺色になり、膿みただれる」がある。
- (10) 辛嶋静志、「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」、『仏教研究』第26号、p. 164.
- (11) Geiger § 65. 2.
- (12) BHSg p. 231.
- (13) W. Schubring, *The Doctrine of the Jainas*, Delhi, 1962, § 93.
- (14) MW s.v. vyadh-
- (15) BHSD s.v. vyadhati.

3. 婉曲的表現：「墓場の増大」

ところで、グループ I にみられたこの「墓場を増大する」或いは、「墓場を満たす」ということはどのようなことを意図しているのであろうか。この表現の源泉と概念を以下に検討してみよう。

kaṭasī という語は特殊な語彙であったらしい。それというのも CPD (s.v. kaṭasī) は Pkt. kaṭasī を提示するが、この語は MIA に含まれる語彙ではなく、所謂 Deśī であり、Deśināmamālā⁽¹⁾ にみられる語彙で、「墓場」、「火葬場」を意味する語である。また、Pischel⁽²⁾ は Pkt. kaṭasī が Skt. *kaṭasī からの派生と解しているが、この Skt. 語は未見であることを示している。そして、*kaṭasī < kaṭa 'corpse' = kaṭa + śī 'to lie' を与えている。これは、「死体を横たえる場所」=「死体を遺棄する場所」を意味する。このことを裏付ける詩節が初期の仏教やジャイナ教に既にみられるのである。

初期仏典に次のような詩節がある。

vaḍḍhenti kaṭasim ghoram ācinanti punabbhavaṃ (Th. 456cd)

かれらは恐ろしい墓場を満たし、何度も生存をくり返す。

vaḍḍhenti kaṭasim ghoram, ādiyanti punabbhavaṃ (Th. 575cd)

かれらは恐ろしい墓場を満たし、何度も生存を受ける。

ここでいう彼らとは前者が愛欲を享樂する凡夫、後者は身体をわがものと思う凡夫のことである。Th. 575cd の同一文が Vinaya ii 296, Aṅguttaranikāya ii 54 等にもある。Norman 教授⁽³⁾によれば、kaṭasī-vaḍḍhana は susāna-vaḍḍhana と同一であり、bhūmi-vaḍḍhana (Jātaka vi 19) とも同様な意味をもつことになる。すなわち、「大地の増大」とは「屍体の堆積」を表わす。

また、M. A. Mehendale⁽⁴⁾ は、bhūmi-vaḍḍhana が字義的には「大地を増大する人」のことであるが、「大地に埋葬され、そのために大地を増やす人」の婉曲的表現であることを記述している。したがって、Th. 456c と 575c の「墓場を満たす」とは死骸が積み上げられることであり、「繰り返し繰り返し墓場を満たす」とは、凡夫が生まれては死に、死んではまた生まれ変わる輪廻転生することを意味している。

一方、初期のジャイナ教でも同様な概念をもっていたようである。「悪趣の増大」(duggati-vaḍḍhana) という表現が『ダサヴェーヤーリヤ』に数回現われ⁽⁵⁾、『イシバーシャーイム』にもみられる。

chiṇṇa-sote bhisam savve kāme kuṇaha savvaso /
 kāmā rogā maṇussāṇaṃ, kāmā duggati-vaḍḍhaṇā //Isibh. 28.1//
 すべての愛欲をすべての面から流れの断たれたものと激しくなせ。

人間たちの愛欲は病気であり、愛欲は悪趣を増大するものである。

先に見たように、ジャイナ教で悪趣とは、地獄か畜生を意図しており、悪趣の増大とは地獄
 或いは畜生に繰り返し生まれ変わることの意味している。

また、直接的に「輪廻の増大」とも言う。

sallaṃ kāmā, viṣaṃ kāmā, kāmā āsivisoṃvama /
 bahu-sādāraṇā kāmā, kāmā saṃsāra-vaḍḍhaṇā //Isibh. 28.4//
 愛欲は矢であり、愛欲は毒であり、愛欲は毒蛇に喩えられる。

愛欲は（他と）多くの共通点を持ち、愛欲は輪廻を増大するものである。

愛欲を減しない限り際限なく輪廻転生が繰り返されるということである。愛欲とは、五根の
 対象としての色、声、香、味、触の五つの欲望（kāmaguṇa）や田畑、黄金、家畜、奴隷と召
 使いといった貪りの対象を指している。仏教でも同様である⁽⁶⁾。

したがって、グループⅠの「繰り返し墓場を増大する」は生死を繰り返す輪廻転生のことで
 あり、グループⅢの「繰り返し屍体を遺棄する場所で自分を膨張させる」も、繰り返し生まれ
 ては死に、死んでまた生まれるという輪廻転生を意味しているのである。また、グループⅥ
 にしても何度も輪廻転生して地獄の苦しみを受けることの婉曲的表現である。さらに、Ⅱの
 「墓場に戻って来る」、Ⅳの「悪趣に戻って来る」、Ⅴの「悪趣を増大する」にしても、どれも
 輪廻転生を婉曲的に表現しているのである。

このように、「墓場の増大」、「大地の増大」や「屍体の堆積」という婉曲的表現は、既に初
 期仏教時代には形成されていたものであり、『法華経』にもそのまま受け継がれていったと言
 えよう。

註

- (1) R. Pischel, *Deśināmamālā of Hemacandra*, 2nd edition, Poona, 1989. H.D.T. Sheth, *Pāia-sadda-mahaṇṇavo*, 2nd edition, Benares 1963, s.v. kaḍāsī.
- (2) Pischel § 238.
- (3) K.R. Norman, *Elders' Verses II*, London 1971, p. 140.
- (4) M.A. Mehendale' "Review of Lüders: *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons*", Berlin 1954, p. 57.

- (5) *A Pāda Index and Reverse Pāda Index to Early Jain Canons: Āyāraṅga, Sūyagaḍa, Uttarajjhāyā, Dasaveyāliya, and Isibhāsiyāim* by Moriichi Yamazaki and Yumi Ousaka with a foreword by K.R. Norman, Tokyo 1995によれば、tamhā eyaṃ viyāṇittā dosaṃ duggai-vaḍḍhaṇaṃ 「故にこの過失は悪趣を増大するものであると知って」という定型句が Dasav. の 5-1, 11b; 6,29b; 6,32b; 6,36b; 6,40b; 6,43b; 6,46b にみられる。
- (6) 拙稿、「沙門の実践道—初期ジャイナ教と原始仏教との対比において—」、『仏教学』第30号、pp. 10–11.

4. 漢訳

しかし、この kaṭasi-vaḍḍhana 「墓場の増大」という婉曲的表現は漢訳者には伝わっていなかったようである。

まず、竺法護訳の『正法華経』の相当部分は、「黒冥之法、數數増長」である。辛嶋静志氏⁽¹⁾によれば、Skt. kaṭa- が中期インド語で kala- となり、この語は *kala- と同一語である。次に短母音と長母音が混同され、*kala- / kāla- と見做され、kāla- = kāla- “black” と解釈されたとみている。

では、kaṭa (= kāla) + si をどのように解釈することができるのだろうか。中期インド語において -as 語幹の s が脱落して -a 語幹と同様に扱われることがある⁽²⁾ ように、もし語幹を kaṭas (= kaṭa) と見做したとすれば、kaṭasi は loc. となり、kaṭasi は m.c. と理解できよう。したがって、この場合、「黒冥之法」とは暗黒の冥土に墮ちる、あるいは生まれることわり(法)と解釈することができ、これが數數増長するのであるから冥土に生まれ変わることが繰り返されることを述べていることになる。それは輪廻転生に他ならない。

この推定が正しいとすれば、kāla- は元来、グループⅢの kaṭa- 「屍体の遺棄する場所」と同一語であり、竺法護はグループⅢの系統に属するテキストを底本にしていたとも考えられる。

次に、鳩摩羅什訳の『妙法蓮華経』をみてみよう。この箇所は、「受胎之微形、世世常増長」とある。『添品妙法蓮華経』も同一である。受胎の微形とは、人が生まれ変わるときに女性の子宮に入って受胎する小さな生命体であるが、それは過去のすべての業を背負っていると考えられている。したがって、ここは「受胎する時に過去の業をすべて背負っており、生まれ変わる度に悪業を積むなら、その悪業は生まれ変わる度にどんどん増していく」と解釈される。

羅什訳の「受胎之微形」と梵文 kaṭasi との間にはどのような関係があるのであろうか。渡辺照宏⁽³⁾は羅什が「受胎之微形、世世常増長」と訳したのは誤解であって、それは kaṭasi を

kalala いわゆる羯羅藍位と勘違いしたためであると想像している。

実は、羅什の誤解や勘違いではなく、受胎之微形と kaṭasi には極めて密接な関係があると言わねばならない。なぜならば、kaṭa- と kalala- とは同一語であるからである。Geiger⁽⁴⁾ は Pāli において重音節脱落 (Haplology) が起こり、1 音節が消失することがあることを記述している。例えば、aḍḍhatatiya に対して aḍḍhatiya, viññāṇāṇācāyatana に対して viññāṇācāyatana 等である。この現象は Pāli だけでなく、MIA の範疇に含まれるすべての方言において起こり得る⁽⁵⁾。したがって、重音節脱落によって、kalala は kala と見做されたのである。

そして、羅什、もしくは羅什の使用したテキストの筆記者が kaṭa- を *kala- の逆成語 (kaṭa- > kaḍa- > kara- > *kala-) と見做したと思われる。あるいは羅什以前に既にテキストが kalala の意味にとれる語 (方言) に改まっていたのかもしれない。いずれにしても kaṭa もしくは kala に相当する語は kalala であったのである。

そこで、kaṭa (= kalala) + si は『正法華経』のところで述べたように、語幹を kaṭas- と理解したとすれば、kaṭasi は loc. となり、kaṭasi は m.c. と解釈できよう。それ故、kalala は胎内の五位の第一の状態である「羯羅藍位」、すなわち胎児の最初期の段階を意味しており、「受胎之微形」は納得のいく訳語と言えよう。羅什はこの詩脚を、衆生はこの世に生を受けて、生存中に数々の業を積み、死と同時にその業を背負ってまた受胎し、新しい胎児として誕生することを幾度となく繰り返して行っていて、永遠の安らぎ (涅槃) を得ることのできない苦しみの多い存在、とみている。

Skt. kaṭa- を竺法護が kāla- と解釈したのに対して、羅什は kala(la)- と解釈した違いはあるが、両者とも衆生を輪廻転生を繰り返し、その度に苦しみを甘受しなければならない存在であると見做していたところに共通点があろう。

このように、本来の語形を逆成語と解釈してしまったと思われる例が、写本の数の多い『法華経』にはしばしばみられるのである。同一箇所、ある写本は A と読み、別な写本では A' と読まれる読みが同時に存在する。例えば、次の詩節 65c における dvāsaṣṭi-drṣṭi-gata と dvāsaṣṭi-drṣṭi-kṛta がこの例である。drṣṭi-kṛta は drṣṭi-kṛtaṃ に対する m.c. である。D2 と O をみると drṣṭi-gata- とあるが、ネパール系写本でこの読みをしているのは Pk と C3 だけである。

Pāli に diṭṭhi-kata- (< kṛta-) はなく、すべて diṭṭhi-gata- である。一例を示せば、

diṭṭhi-gatāni anventā idaṃ seyyo 'ti maññare (Th. 933cd)

悪い見解に従って「これはすぐれている」と彼らは考える。

があり、diṭṭhi-gata は saddhamma 「正しい教え」の反対語としてあらわれる。BHSD⁽⁶⁾ に

よれば、*dr̥ṣṭi-kṛta* も *dr̥ṣṭi-gata* も同一語であるが、パーリに *diṭṭhi-gata*- しかないことや D_2 と O 、それにネパール系写本の中で古形を保っている貝葉本と考えられる P_k と C_3 の読みが *dr̥ṣṭi-gata*- であるから、古い読みは *dr̥ṣṭi-gata(m)* であったであろうことが推測できる。

そこで、何故 *gata* が *kṛta* と読まれたか、すなわち *dr̥ṣṭi-gata* “recourse to wrong view”⁽⁷⁾ が何故 *dr̥ṣṭi-kṛta* に読み改められたかを推測してみよう。Pāli において *-k-/-g-* が起こり得ることが Lüders⁽⁸⁾ によって指摘されているし、Pkt. においても *-k- > -g-* は可能である⁽⁹⁾。*pratīkṛtya > Pāli paṭigacca / paṭikacca* “(doing) in advance, already” はこの典型である。それに嘗て論じたことであるが⁽¹⁰⁾、*Udānavarga* 32. 54 にみられる *grāmakaṇṭaka* は *Dasaveyāliya* 10, 11 では *gāmakaṇṭaya/-ga* とあるが、これら 2 作品の並行詩脚である *Udāna* 3, 3 では *kāmakaṇṭaka* となっている。この *g > k* は、ジャイナ教で述べられるところの、苦行者が村々で受ける艱難辛苦を「村の棘」と形容した、という正確な意味⁽¹¹⁾ がわからなかったため、*kāmakaṇṭaka* と逆成して「諸感官を不快にするもの」と解釈した例である。このように、*-k- / -g-* の混同がしばしば起こること、それに意味の違いもみられないことから、*gata* を *kṛta* と誤って逆成 (Wrong Backformation) した結果であるように思われる。

註

- (1) Seishi Karashima, *The Textual Study of the Chinese Versions of the Saddharmapuṇḍarikasūtra in the light of the Sanskrit and Tibetan Versions*, 1992, Tokyo, p. 53.
- (2) Pischel §§ 407; 409: *tave = tapasi, sottē = sottasi, etc.*
- (3) 「法華経原典の成立に関する一考察」、金倉圓照編『法華経の成立と展開』1970年、pp. 103-4 = 『渡辺照宏・仏教学論集』、p. 324.
- (4) Geiger § 65. 2.
- (5) Pischel § 165.
- (6) BHSD s.v. *dr̥ṣṭi-kṛta, -gata*.
- (7) *Pāli Tipiṭakam Concordance*, s.v. *diṭṭhi-gata*.
- (8) *Beobachtungen über die Sprache des buddhistischen Urkanons*, Berlin 1954, § 131.
- (9) Pischel § 202.
- (10) 拙稿、「ウダーナヴァルガ 32. 54」、東北印度学宗教学会『論集』、第11号、p. 167.
- (11) *Āyāraṅga* 1.9.3.7, *Uttarajjhāya* 2.25, etc. で述べられる。

nihāya daṇḍaṃ paṇehiṃ taṃ kāyaṃ vosajja-m-aṇaḡāre /

aha gāma-kaṇṭae, bhagavaṃ te ahiyāsae abhisameccā, //Āy. 1. 9. 3. 7//

生きものに対して杖を（使用することを）止め、身体を放棄し、家なき人、世尊は完

全な智慧を得て、村の棘に耐える。

マハーヴィーラはラーダ (Lāḍha) 地方で特に困難が多かったようである。住人たちに襲われたり、罵声を浴びせられるばかりでなく、犬どもに噛みつかれるなどの多くの苦難があったことを、この詩節は「村の棘」(gāma-kaṅṭaa < grāma-kaṅṭaka) と表現している。

5. むすび

D₂ D₃を kaṭasiṃ vivardhenti punas punaḥ tā(ṃ) と読めば、tā(ṃ) は f. acc. となり、kaṭasiṃ にかかる。また、中央アジア写本 O の読み kaṭasiṃ ca vardhenti punas punaḥ te の te は m. pl. nom. で、vardhenti の主語となり、O はチベット語訳 : dur khrod de dag phyi phyir hphel bar byed と同一である。それにもかかわらず、ギルギット写本と中央アジア写本の両者は、「彼らは墓場を増大する」という同じ意味をもつ詩脚である。ネパール系写本のグループ I は、これら D₂ D₃ O と同一系統に属している。

ネパール系写本の六つのグループ、すなわち、I : 「彼らは繰り返し墓場を増大する」、II : 「繰り返し墓場に戻ってくる」、III : 「繰り返し塚墓において彼らを膨張させる」、IV : 「繰り返し悪趣に戻ってくる」、V : 「繰り返し悪趣を増大する」、VI : 「繰り返し悪趣において彼らを膨張させる」は、それぞれ別個の伝承ということになる。『正法華経』も『妙法蓮華経』も kaṭa-から派生した中期インド語を翻訳しているか、あるいは既にそのような読みが確立していたテキストから直接翻訳したと見做すことができることから、グループ III の系統に属すると言えよう。このように伝承の違いはあっても、いずれの伝承もこの詩脚において「輪廻転生」に言及していることにはかわりはない。

もっとも系統を分類する基準をどこに置くかによって系統分けが異なってくる。例えば、用いられた語彙の違いに置くのか、もっと厳密に同じ語であっても正書法の違いを許容するのかわらないのかによっても違ってくる。或いは用いられた語にはとらわれずに意味内容が同じであればよいという基準を儲ければ、系統はもっと絞られることになる。

今後、情報処理の技法を活用して、データベース化したテキストの統計解析を行い、全章に亘って貝葉本の系統説明と各紙本がそれら貝葉本のどの系統に属するかを明らかにする必要があるであろう。それと同時に、辛嶋⁽¹⁾が言う、梵文写本と漢訳仏典の正確な読解に基づく比較研究、さらには MIA の韻律学、音韻学、文法学的視座からの総合研究こそが、『法華経』に横たわる未解決の諸問題の解明に繋がるであろう。

註

- (1) 辛嶋静志、「初期大乘仏典の文献学的研究への新しい視点」、『仏教研究』第26号、pp. 157-76.